

とよなか ゆめ・まち・ひと

リレーエッセー



蝉せみの 声 が 聞 こ え て

「はじめまして、蟬谷めぐ実です」「あら、聞かないお名前です」「第十一回野性時代新人賞を受賞した新米の作家です」「ああ、小説家さんですか」「そうですね。『化け者心中』という本でデビューしたんです」そうやって自己紹介をしつつ本の紹介をしつつで、少し場が温まってきた頃によく聞かれる質問がある。

「蟬谷めぐ実の本名ですか」「いいえ、と答えると重ねて問われる。

「それなら、蟬になにか思い入れでも?」

そこで私はいったん、口を

つぐむ。夏になるとそこら中でみんみんじいじいと大きな声で鳴き散らかしているあの虫。基本的に生き物は好きだが、ランキングで上位に食い込むほどでもない。それなのに、はてさて一体どうして私は一生使うことになるペンネームに、この生き物を使ったのだろうか。考えて、思い出すのは私の実家、豊中の風景だ。

おんぎゃあと産声を上げてから大学進学のために東京に出るまで、私は豊中市で過ごした。シカゴなんてしゃれた場所に住んでいた期間もあった。

だが、中学の英語のテストで一桁でないことを飛び上がって喜んでいたことから、それがどんなに短い間だったかはお分かりいただけると思う。小さい頃は読書やゲームよりも外で駆け回り回る方が好きだった。箕面自由学園幼稚園では毎日、友達と泥だらけになっていたが、大阪教育大学附属池田小学校という池田市にある小学校に通い始めると、モノレール、阪急電車を乗り継がなければ会いにいけない友達ばかりになり、祖父の手を引き、妹を従え、家近くの公園で遊ぶことが多くなった。

せみ たに み
蟬谷めぐ実 [作家]

平成4年(1992)豊中市生まれ。大学進学まで豊中で過ごす。早稲田大学文学部で演劇映像コースを専攻し、デビュー作『化け者心中』の舞台となっている、化政期の歌舞伎をテーマに卒論を書く。広告代理店勤務を経て、現在は大学職員。令和2年(2020)『化け者心中』で第11回 小説 野性時代 新人賞を受賞。



撮影：小嶋淑子



赤坂上池公園は花しようぶ園もある緑の多い公園だ。虫捕りが自らに課せられた任務であると思っている子どもには天国のような場所でも、もちろん蝉もわんさかといた。夏になると朝早くから虫捕り網を片手に公園に出掛け、四方八方から脳天に向かって降り注ぐ蝉の声を浴びた。腹をびくびくと震わせ、命を削って鳴くそのエネルギーがシチュエーション映像が今でも私の中に残っていて、それでも私は蝉を自分のペンネームに入れたのだと思う。

夏が終わりに近づくと、この公園では毎年夏祭りが開催される。運動場の真ん中には立派な櫓が立ち、その上では太鼓が鳴らされる。家の窓を開ければ、ぬるい夜の空気と一緒に盆踊りの曲が流れ込んできて、私はそれを聞くのが好きだった。ドラえもん音頭に河内音頭は今でも口ずさめるほどだが、中でも強烈に印象に残っているのはお富さん。今の今まで知らなかったのだ



Q

出来上がった本を手にした時の気持ちは？

A

本を目の前にしてもまだ信じられない気持ちがあったので、すぐさま本を触りにいったのをよく覚えています。何度か表紙をなでてようやく実感が湧きました。その日は本と離れ難く、トイレの中にまで本を持ち込んでいました。

が、この曲は与話情浮名横櫓という江戸末期の歌舞伎が元ネタの歌謡曲で、私は江戸の歌舞伎を舞台にした小説でデビュー。なんだか運命的なものを感ずてしまう。

こうして振り返ってみると、豊中という土壌が私を育ててくれたことがよく分かる。豊中で過ごした思い出がしっか

り私の中には根付いていて、それが栄養分となって蝉谷めぐ実を生み出してくれた。いつか恩返しできればと思う。

「はじめまして、蝉谷めぐ実です」「ああ、知ってますよ、そういうえば、この豊中出身だそうで」くらいまで頑張りたいたい所存だ。